

氏名 (本籍)	こばやし まどか 小林 円 (兵庫県)
学位の種類	博士 (被服環境学)
学位記番号	博乙第 27 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 11 日
学位授与の要件	学位規程第 5 条第 2 項該当
論文題目	服装社会学の分析視角 —マイクロ社会学的立場からの一試論—
論文審査委員	(主査) 教授 濱田 勝宏
論文審査委員	教授 照井 義則                      教授 申 恩泳 教授 土屋 淳二 (早稲田大学)

## 論文内容の要旨

服装に関する社会科学的研究の必要性が説かれ始めて、我が国では半世紀を越すほどになった。その結果、新しい学問領域としての服装社会学が誕生した。服装社会学という新しい領域の発展において、先達が成し遂げてきた活動に対し、まずは敬意を表し謝意を示さねばならない。しかし、同時に様々な社会状況の変化に合致した服装社会学の研究志向や方法論について、再考する時期を迎えている。

そこで、本論文では社会学の視点から服装社会学の歴史と現状を概観し、服装社会学の全体を確認した上でいくつかの提言を試みる。特に、本論文におけるキー概念は「マイクロ社会学的分析視角」である。

本論文は 4 章により構成されている。第 1 章は、服装社会学の史的展開と題し、服装社会学の成立過程について論じる。第 2 章は、服装社会学における「社会」の概念と題し、服装社会学が扱う「社会」とは何かについて論じる。第 3 章は、服装社会学におけるマイクロ社会学的分析視角と題し、服装社会学にマイクロ社会学的視角を導入することの妥当性について論じる。最後に第 4 章では、マイクロ社会学的分析視角における服装社会学の今日的課題と題して、社会的存在としての個人の価値観や心理傾向が、服装という次元でどのような関係性を用意しているかについて考察する。その前提として、服装それ自体が個人の「嗜好 (taste)」や社会的文化的要因に関わるものであるとする。とすれば、個人の嗜好の集まりが社会を形成するとともに、社会も個人の服装の形成に影響を与えている。したがって、個人と社会の相関を、服装を媒介にして捉えることをマイクロ社会学的分析視角とし、こうしたマイクロ社会学的立場がマクロ社会学的立場に劣らず重要であることを本論文の結論とする。

なお、本論文における「マイクロ社会学的分析視角」とは、富永健一の「マイクロ社会」概念に依拠し、「社会を行為する個人の視点から見ようとする立場すなわち、社会レベルではなく、個人レベルにおいて考えられた社会学的分析」つまり、「社会による個人の人格形成に視点をおいた分析」とする。加えて、「服装」とは「衣服のみならず着装している人間の心理、価値観、社会的行動を含めた状態を意味するもの」、「人間が衣服を着装し、社会的に何らかの行動をとっている状態」

として定義する。各章の概要は以下の通りである。

## 第1章 服装社会学の史的展開

まず、服装社会学を「広義の服装社会学」と「狭義の服装社会学」に分類し、本論文における服装社会学という語は「狭義の服装社会学」として使用する。

「広義の服装社会学」とは、社会学、心理学、文化人類学、経済学、経営学などの社会諸科学から研究方法を援用し、服装の「社会科学」的側面の研究を行うものである。一方、「狭義の服装社会学」とは、服装と「社会学」の関連を跡づける立場の研究である。

次に、服装社会学の研究系譜を述べる。その黎明期として、服装・ファッションに関係のある社会現象を社会学的な方法を用いて研究する立場と、「服装社会学」という名称の採用を発端とする立場を選び研究史的展開を示す。

加えて、服装社会学の新たな方向性を二つの研究志向を通して試論的に示す。第一は「服装を媒介にして社会の特性を明らかにする研究領域」という志向。第二は「個人が主体となって着装する衣服と、社会の関係を捉える契機とする研究領域」という志向である。本論文では、二つの研究志向のうち後者を中心に位置づけ、ミクロ社会学的分析視角の重要性を強調する。つまり、個人と社会の相関を、服装を媒介にして捉えることをミクロ社会学的分析視角とする。このように、二つの研究志向を通して、マクロとミクロの両側面を扱うことを可能にする。

最後に、服装社会学の10研究領域を試論的に示す。主な領域としては、1. 服装と文化・社会、2. 服装と制度、3. 服装と社会過程、4. 服装の構造と下位システム、5. 服装と社会問題、6. 服装関連調査、7. 服装と社会化、8. 服装とパーソナリティ、9. 服装とコミュニケーション、10. 服装社会学という標題に関する研究の10領域に区分する。

## 第2章 服装社会学における「社会」の概念

本論文における「社会」の定義は、富永健一の「マクロ社会」、「マクロ準社会」、「ミクロ社会」そして、「広義の社会」なる「社会の概念の4区分」を援用する。マクロ社会とは複数の個人を包節し、それらの個人を相互行為と社会関係でつなぎ、個人をオーガナイズし、内と外との境界を客観的に確定した社会である。

本論文で特に重要なミクロ社会とは、「社会を行為する個人の視点から見ようとする立場」だ。つまり、社会が個人の「内」すなわち、個人の意識の内部にその前提を置くアプローチだ。要するに、人間が社会を形成する前提をなすものとしての相互行為やコミュニケーション行為、自我形成やパーソナリティ形成、共感・相互主観・共通社会意識の形成など「行為論的諸領域」を含むものである。加えて、ゲオルク・ジンメル(Simmel, Georg.)の「心的相互作用」、マックス・ヴェーバー(Weber, Max.)の「社会的行為」を通して、社会が個人に内在しているという「ミクロ社会」的立場の特徴を明らかにする。

## 第3章 服装社会学におけるミクロ社会学的分析視角の妥当性

ミクロ社会学的分析視角とは、社会による個人の人格形成に視点をおいた分析すなわち、社会レベルではなく、個人レベルにおいて考えられた社会学的分析である。具体的には、ジンメルの「心的相互作用」とチャールズ・ホートン・クーリー(Cooley, Charles. Horton.)の「社会心」や「鏡に映った自我」などの概念に依拠しながら、両者が「個人と社会」をどのように位置づけたかについて論じ、上記の分析視角が「人間-服装-社会」を一揃いにして扱う服装社会学の研究志向と合致する点を確認した上で、ミクロ社会学的分析視角を服装社会学に導入することの妥当性を検証する。

#### 第4章 ミクロ社会学的分析視角における服装社会学の今日的課題

服装社会学の今日的課題の1つは、社会的存在としての個人の価値観や心理傾向が、服装という次元でどのような関係性を用意しているかである。その前提として、服装それ自体が個人の「嗜好(taste)」や社会的文化的要因に関わるものであるとする立場から私見を述べ、本論文の結論として位置づける。

かつて、服装は社会的身分制度や階級を背景としたマクロ社会学的視点から論じられ、近年はファッション産業という現代性ととも研究されている。確かに、産業の構造的現象であるというマクロ的視点からの位置づけは重要である。しかし、人は「他者との差異化」のため、また、「個人が主体となって個人的な目的で装う」ことも事実である。とすれば、個人が日常の装いの中でどのような価値観や心理傾向発現の媒体として「服を装う」のかというミクロ的な考察すなわち、社会的相互作用のレベルでの考察も合わせて、社会学の扱う方向性とするのがミクロ社会学的分析視角において服装社会学を捉える本論文の立場である。

結論として、服装が個人の価値観や心理傾向を媒介するものであり、同時に社会的な現象であることを前提とする服装社会学の立場において、ミクロ社会学的分析視角が新たな視座の提供を可能にする。つまり、服装が社会的な現象であることを前提とする服装社会学の立場において、マクロ社会学的分析とともにミクロ社会学的分析の援用も必要であることを強調する。

要するに、個人が主体として、自らの「嗜好(taste)」に基づき服を装う以上、個人の嗜好の集まりが社会を形成するとともに、社会も個人の服装の形成に影響を与えている。したがって、個人と社会の相関を、服装を媒介にして捉えることを服装社会学におけるミクロ社会学的分析視角とし、こうしたミクロ社会学的立場がマクロ社会学的立場に劣らず重要であることを示すことが本論文の結論である。

#### 論文審査結果の要旨

本論文は、服装社会学研究におけるミクロ社会学的視角の必要性を説くものである。より正確には、既に存在しているミクロ社会学的研究（主としてG. H. ミードやH. ブルーマーに依拠するものなど）の基礎を形成した人々の所論を再読し再評価することの重要性を強調するものである。

学位申請者も指摘するように、服装に関する社会科学研究の必要性が説かれ始めてから、我が国では半世紀以上を経過している。そのプロセスを概観すると、初期の研究者達、主として社会学や社会心理学に立脚する人々の研究手法と当時の服装をめぐる社会状況との関連から、大別すればマクロ社会学的分析が優先され、それに対してミクロ社会学的な研究はあまり顧みられることはなかったと言ってよい。しかし、その後、服装社会学研究の多様化とより社会学化が進む中で、ミクロ社会学的分析の必要性が説かれ、今日に至っていると言える。

本論文は4章で構成されている。各章のテーマとその内容は以下の通りである。

まず、第1章は服装社会学の史的展開として、服装社会学の成立と研究志向の広がり、服装社会学の四領域や社会学の隣接科学との関わりなどを追っている。その中で服装社会学の研究領域を「広義の服装社会学」と「狭義の服装社会学」に大別するとともに、自身は、社会学に主軸をおく狭義の服装社会学からの提言を試みるとしている。また、申請者によれば、服装社会学は、

「人間の最も個人的で私的なものである服装を媒介にして、社会を捉える研究領域」であり、「個人と社会の相関を、服装を媒介にして捉える研究領域」である。ここでいう社会が即ちマイクロ社会であり、マイクロ社会学的分析のひとつの出発点となるとしている点は、特徴的である。また、服装社会学が対象とすべき研究領域に10分野をあげ、服装社会学の使命に関する私論を展開しているが、これも今後の検討に付されるべきものとして、注目してよいであろう。

第2章においては、服装社会学における「社会」を正面から捉えることに力点を置いている。結論的には富永健一の所論に負うところが大きいだが、社会の定義づけとマイクロ社会の捉え方は、社会学史的な考察も加えられて、基本的プロセスを十分に踏まえた結果として呈示されている。G. ジンメルやM. ヴェーバーをふり返るなどの作業ののち、最終的に到達するのが、ジンメルからC. H. クーリーへの流れである。

第3章では、マイクロ社会学的分析の妥当性を論じている。具体的には、ジンメルとクーリーに焦点がおかれている。ジンメルについては、周知の「心的相互作用」をとりあげている。E. デュルケムやヴェーバーとの比較を念頭におきながら、結局、形式社会学と総括される中での社会化と心的相互作用について詳細な検討を加えている点は評価してよい。次に、クーリーを過去の人とせず、その所論に位置する「社会心」と「鏡に映った自我」を再考することの重要性を強調している。そして服装こそは、ジンメルやクーリーが説く「社会的相互行為」もしくは「社会的相互作用」の媒体であり、そこにマイクロ社会学的分析の必要性があり服装社会学研究においても大いに有意性があるとする主張といえる。

第4章ではマイクロ社会学的分析視角における服装社会学の今日的課題として、総括的に述べている。特に、マイクロ社会学的分析への移行について再確認するとともに、この分析における課題として「服装と社会化」、「服装とパーソナリティ」、「服装とコミュニケーション」をあげている。これは、マイクロ社会学的分析のこれまでを整理し、さらにひとつの研究領域として整序するための一提言として独自性を評価できる。ただし、緻密な研究がさらに要求されることも課題として残されている。

学位申請者は、大学在学中から心理学に関心を持ち、自ら古典的文献を読みながら、次第に人間と服装の関連に興味を抱くようになった。そして大学院に進学し、本格的にその興味を服装社会学の研究の中で学的に深めていくことを決意した。以来、社会学史、ひいては服装社会学の変遷に研究の眼を向けてきた。その結果として服装社会学の分析視角のひとつとしてマイクロ社会学の重要性を主張するようになり、それらをまとめたのが本論文である。研究全体を通じた論理の構成、先行研究に関する解読力は、水準以上の資質を保有しており、自立した研究者として将来が期待できる者との判断にたって、博士（被服環境学）の学位を授与するに相応しいものと認定する。